

科目区分	【博士】言語科学専攻科目						
科目名	言語科学研究演習II						
担当教員	西垣内 泰介					科目ナンバ-	DL7010
学期	通年／Full Year	曜日・時限	水曜2	配当学年	1～3	単位数	4.0
授業のテーマ	文法理論の特定的研究						
授業の概要	最近の文法理論で注目されているWh構文に関わる諸現象の諸相を関連する最近の著作を検討しながら考えていきたい。特に様々な言語におけるスコープと省略現象、イントネーションとの関わりを中心に新しい見方を探っていきたい。						
到達目標	文法理論の最先端の考え方について専門的な理解を深め批判的に議論することができる。[知識・理解] 言語能力のあり方について専門的に考えることができ、独自の分析を含む研究発表をすることができる。あるいはその見通しができる。[知識・理解] 授業の内容を自分の学位論文の進展に役立てることができる。[態度・志向性]						
授業計画	第1回 日英語のWH構文 統語的移動 第2回 日英語のWH構文 LF 移動 第3回 日英語のWH構文 スコープの問題 第4回 日英語のWH構文 束縛現象との関係 第5回 日英語のWH構文 まとめ 第6回 分裂文の論理構造 指定文と指定文 第7回 分裂文の論理構造 指定文の派生 第8回 分裂文の論理構造 指定文と束縛現象 第9回 分裂文の論理構造 指定文とスコープ 第10回 分裂文の論理構造 まとめ 第11回 イントネーションとスコープ 疑問文とイントネーション 第12回 イントネーションとスコープ 多様性の問題 第13回 イントネーションとスコープ 実験的分析の方法 第14回 概観 第15回 概観と展望 第16回 WH構文と省略現象 先行研究 第17回 WH構文と省略現象 移動 vs. 再構築 第18回 WH構文と省略現象 連関性 第19回 WH構文と省略現象 統語的制約との関係 第20回 局所性との関係を重点的に 先行研究 第21回 局所性との関係を重点的に 移動と削除 第22回 局所性との関係を重点的に 「そのまま」での削除 第23回 局所性との関係を重点的に まとめ 第24回 視点現象 先行研究 第25回 視点現象 機能主義のアプローチ 第26回 視点現象 構造にもとづくアプローチ 第27回 視点現象 英語における現象 第28回 視点現象 阻止効果 第29回 視点現象 まとめ 第30回 概観						
授業外における学習（準備学習の内容・時間）	授業で扱っている問題を自主的に考え、関連する文献に注意を払う。 授業前：次の授業で学習する内容について準備し、関連する参考文献を調べる。 授業後：授業で学習した内容を復習し、授業で示された参考文献を読む。 準備と復習に最低2時間必要です。 授業の予習・復習にとどまらず、常に研究に関わる活動を行うことが必要。						
授業方法	演習						
評価基準と評価方法	履修者は各自の現在の関心領域について発表する。評価はその内容と学期末のレポートによる。						
履修上の注意	特になし。						

教科書	教室で指示する。
参考書	

科目区分	【博士】言語科学専攻科目						
科目名	言語科学研究演習Ⅰ						
担当教員	黒木 邦彦					科目ナンバ-	DL7060
学期	通年／Full Year	曜日・時限	火曜5	配当学年	1～3	単位数	4.0
授業のテーマ	消滅の危機に有る方言の記録						
授業の概要	消滅の危機に有る方言の記録として、文法書、辞書、注釈付き談話資料を作る。						
到達目標	<p>(1) 知識・理解:</p> <p>a. 自然言語の音韻が理解できる。</p> <p>b. 自然言語の文法が理解できる。</p> <p>c. 日本語の多様性に意識的である。</p> <p>(2) 汎用的技能:</p> <p>a. 学説が必ずしも定まっていないことに意識的である。</p> <p>b. 事物の構造に意識的である。</p> <p>c. 科学的分析の基礎が実践できる。</p> <p>(3) 態度・志向性:</p> <p>授業を通じて、研究の種を掴む。</p>						
授業計画	<p>01: 授業概要、授業計画、到達目標の説明</p> <p>02: 日本語の社会的状況</p> <p>03: 日本語の危機方言</p> <p>04: 危機方言概観</p> <p>05: 音声から文字への転写</p> <p>06: 文の構造</p> <p>07: 語の構造</p> <p>08: アプリを利用した自動注釈</p> <p>09: 自動注釈を行なうための形態素分析</p> <p>10: 自動注釈を行なうための辞書編纂</p> <p>11: 音韻の記述</p> <p>12: 語形成の記述</p> <p>13: 統語構造の記述</p> <p>14: 全体のまとめと期末課題指導</p> <p>15: 期末課題添削</p> <p>16-28: 文法書、辞書、談話資料の編纂</p> <p>29: 全体のまとめと期末課題指導</p> <p>30: 期末課題添削</p>						
授業外における学習（準備学習の内容・時間）	<p>(1) 授業前学習（毎週2時間）：教員が指示した重要語句や参考文献の予習。</p> <p>(2) 授業後学習（毎週2時間）：授業内容の復習と期末課題の準備。</p>						
授業方法	<p>(1) 板書やスクリーンを活用しながら講義を行なったのち、授業内で完結する課題を与える。</p> <p>(2) 練習問題や課題を複数人で行なう機会が有る。</p> <p>(3) 提出課題のうち、学習効果の高いものは、匿名処理を施して、受講者全員で共有する。</p>						
評価基準と評価方法	<p>(1) 授業内課題：50%</p> <p>到達目標（1, 3）の確認。</p> <p>教員が授業内で与えた課題に対して、積極的に、かつ、的確に回答したか。</p> <p>(2) 期末課題：50%</p> <p>到達目標（2, 3）の確認。</p> <p>授業内容に即した論理的文章の作成。</p>						
履修上の注意	特段の理由無く欠席した者に対する学習補助は一切行なわない。						
教科書	無し。						

参考書	
-----	--

科目区分	【博士】言語科学専攻科目						
科目名	言語科学研究演習Ⅳ						
担当教員	松田 謙次郎					科目ナンバ-	DL7030
学期	通年／Full Year	曜日・時限	水曜5	配当学年	1～3	単位数	4.0
授業のテーマ	社会言語学・変異理論関連論文の執筆・学会発表へ向けて						
授業の概要	特に博士課程の院生にとって、学会発表（ポスター発表、口頭発表）を行うこと、そして論文執筆を行うことがきわめて重要であることは言うまでもない。この授業では、各自が抱える社会言語学・変異理論関連のトピックについて毎回発表を行ってもらい、論文執筆、学会発表を目標にした準備を行ってもらおう。松田も現在進行中のテーマ・論文について発表を行い、受講者とディスカッションを行う。各々のトピックに対するディスカッション、そして発表や執筆途中の論文への参加者同士のフィードバックはもちろん、発表応募の書き方、実際の学会発表が決定した（ている）場合にはその予行演習にも充てる。加えて、学期中に開催される諸学会での口頭発表について報告をしてもらい、受講生同士で批判を加え合う。実践的な面では、ハンドアウトの作成、PowerPointを始めとするパソコンを使用した発表の練習、質疑応答の模擬演習など、学会発表の訓練も行う予定である。参加者は、学会発表への実際の応募、または最低限、応募可能なレベルの原稿作成を義務づけられることになる。						
到達目標	博士論文執筆への準備に拍車を掛け、学生が博士論文完成を射程距離内に収めることができる。						
授業計画	第1回 前期イントロ 第2回 発表で気をつけるべきこと 第3回 スライドの書き方 第4回 プレゼンの実践的講習 第5回 院生による現在のテーマ紹介 第6回 松田の現在の研究テーマに関する発表 1: 可能形研究 第7回 松田の現在の研究テーマに関する発表 2: 格助詞「を」のゼロマーク化研究 第8回 可能形研究・格助詞「を」のゼロマーク化研究に関する議論 第9回 文献・学会報告 第10回 松田の現在の研究テーマに関する発表 3: 国会会議録研究 第11回 松田の現在の研究テーマに関する発表 4: 地方会議録研究 第12回 国会会議録研究・地方会議録研究に関する議論 第13回 院生による現在のテーマに関する中間発表 第14回 院生による現在のテーマに関する中間発表に関する議論 第15回 前期まとめ 第16回 後期イントロ 第17回 松田の現在の研究テーマに関する発表 5: 法令における言語変異/変容 第18回 松田の現在の研究テーマに関する発表 6: 岡崎敬語調査 第19回 法令における言語変異/変容・岡崎敬語調査に関する文献紹介 第20回 法令における言語変異/変容・岡崎敬語調査に関する議論 第21回 松田の現在の研究テーマに関する発表 7: 岡田コレクションの分析 第22回 松田の現在の研究テーマに関する発表 8: 国会審議映像検索システムの活用 第23回 岡田コレクションの分析・国会審議映像検索システムの活用に関する文献紹介 第24回 岡田コレクションの分析・国会審議映像検索システムの活用に関する議論 第25回 松田の現在の研究テーマに関する発表 9: ネットの集団語 第26回 松田の現在の研究テーマに関する発表 10: 日本の社会言語学史 第27回 ネットの集団語・日本の社会言語学史に関する文献紹介 第28回 ネットの集団語・日本の社会言語学史に関する議論 第29回 院生による現在のテーマに関する最終発表 第30回 院生による現在のテーマに関する最終発表に関する議論						
授業外における学習（準備学習の内容・時間）	【授業前準備学習】シラバスで明示した各回の授業で扱う内容を予習し、予想される疑問点を整理しておく（学習時間：2時間） 【授業後準備学習】授業内で説明した事柄の反芻や授業内でのディスカッションで指摘された問題点の復習などを行い、授業で扱われた内容を自分なりに整理する（学習時間：2時間）						
授業方法	発表						
評価基準と評価方法	発表と最終レポートをそれぞれ50%ずつ評価失する。						

履修上の注意	■参加者は積極的に学会に参加し、発表応募を行うこと。
教科書	なし
参考書	なし

科目区分	【博士】言語科学専攻科目						
科目名	言語科学研究演習V						
担当教員	柏本 吉章					科目ナンバ-	DL7040
学期	通年／Full Year	曜日・時限	金曜4	配当学年	1～3	単位数	4.0
授業のテーマ	モダリティとその周辺						
授業の概要	モダリティを中心とした英語の動詞文法が表現する心理的意味について、各種の文献を講読しながら、その体系的な整理の可能性について考える。						
到達目標	(1) モダリティに関する各種概念に習熟し、英語のモダリティ表現を体系的に整理して示すことができる。【知識・理解】 (2) 意味論・語用論の諸概念について論理的に考察し、それに基づいた適切な議論を行うことができる。【態度・志向性】						
授業計画	第1回 前期Introduction: モダリティとその周辺 第2回 Leechのモダリティ論 (1) 時間の表現との関係 第3回 Leechのモダリティ論 (2) 未来表現との関係 第4回 Leechのモダリティ論 (3) 心理的意味 第5回 Leechのモダリティ論 (4) 対人関係的意味 第6回 Leechのモダリティ論 (5) 仮定的意味 第7回 テーマ発表とディスカッション 第8回 Palmerのモダリティ論 (1) ムードとモダリティ 第9回 Palmerのモダリティ論 (2) 仮定法の位置づけ 第10回 Palmerのモダリティ論 (3) テンスとモダリティ 第11回 Palmerのモダリティ論 (4) アスペクトモダリティ 第12回 Palmerのモダリティ論 (5) 主観性 第13回 Palmerのモダリティ論 (6) 発話行為とモダリティ 第14回 テーマ発表とディスカッション 第15回 前期のまとめとレポート作成指導 第16回 後期Introduction: 英語のモダリティと日本語のモダリティ 第17回 Huddlestonのモダリティ論 (1) 動詞の文法 第18回 Huddlestonのモダリティ論 (2) テンスとモダリティ 第19回 Huddlestonのモダリティ論 (3) 時間的意味と法的意味 第20回 Huddlestonのモダリティ論 (4) モダリティと主観性 第21回 Huddlestonのモダリティ論 (5) モダリティの強さ 第22回 Huddlestonのモダリティ論 (6) 仮定法 第23回 テーマ発表とディスカッション 第24回 日英語のモダリティ (1) 主観性の表現 第25回 日英語のモダリティ (2) モダリティと命題 第26回 日英語のモダリティ (3) 副詞的表現 第27回 日英語のモダリティ (4) 感情表現のモダリティ 第28回 日英語のモダリティ (5) 仮定の表現 第29回 テーマ発表とディスカッション 第30回 後期のまとめとレポート作成指導						
授業外における学習(準備学習の内容・時間)	授業前学習: 授業で扱う論文の当該箇所の精読と関連する問題の検討 <2時間> 授業後学習: 授業で取り上げた内容の要点と重要箇所の確認・整理、参考文献の関連箇所の確認 <2時間>						
授業方法	論文の講読とそれに基づく発表およびディスカッション						
評価基準と評価方法	平常点(授業での貢献度)40%、期末課題成績60% 平常点: 予習の充実度や授業内でのディスカッションでの貢献度などについて評価する。到達目標(1)(2)に関する到達度の確認。 期末課題: 授業テーマに関する発展的考察の明確性・具体性・独自性について評価する。到達目標(1)(2)に関する到達度の確認。						
履修上の注意	ディスカッションへの積極的な参加を期待する。						

教科書	プリント使用
参考書	澤田治美 著『モダリティ』, 開拓社, 2006 Leech, Geoffrey, Meaning and the English Verb, Pearson Education, 2004